

みなと・新橋

今・むかし新聞

第13号
令和6年3月

『語り継ぐ』ということの重要さ』

当時の状況等直接聞かなければわからない部分が多くあります。当事者の体験談を、語り継ぎ、その当時の風習・社会について考えるため、語り部の方々の体験されたことを記録に残す必要を感じ、『みなと新橋今・むかし新聞』を今年も発行します。

『朴歯の思い出』

武恒雄

近頃、下駄屋さんを見掛けるのが、少ない。革靴でも運動靴でも簡単に手に入れられるからだろう。高校生時代は、学校まで徒歩三十分位の所に住んでいたから、朴歯の高下駄で通学していたこともあった。

思い出してみると、雪道で歯と歯の間に雪がくっついて歩きにくく、棒切れなどで、こそげ落したりしたっけ。

また、その時分は映画全盛時代で、近所の三流館での二本立て、三本立て、いつも満員、満席、他人の頭越しの観賞だったが、高下駄の十センチが強い味方だったナア…

下駄の歯は、はけば減るもの、それを交換してもらったのも下駄屋だったし、鼻緒が切れて、修繕する紐つきれも無く、ぶら下げてはだして家まで帰ってきたり、私達には「下駄」には思い出すことが多い。



『バラックでも嬉しかった』

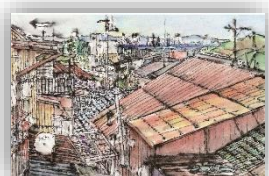
井上繁

戦前、私が住んでいた家は道路を挟んで目の前が大学の付属病院でした。その病院を空襲による延焼か

ら守るという理由のもと、道路沿いの家屋は私の家を含めてすべて強制的に取り壊されました。

私の母、弟、3人の姉妹は埼玉県の母の実家近くの町に既に疎開しており、東京に残っていた父と私はそれまで住んでいた家近くの、家族が全員疎開して空き家に無断で入って暮らしました。

昭和20年4月5日の空襲で、取り壊された家があった場所一帯は病院をも含めて焼失しました。もしそこで暮らしていたら猛火の下を逃げ惑うか、もしかすると焼死していたかも知れません。



その後、何回かの空襲で周囲は殆ど焼失しましたが、私が住んでいた家は焼け残ったのです。やがて終戦となり、その家の持ち主が疎開先から戻って来て、父と私はその家から立ち退き、郊外の父の実兄の家へと移りました。

そこで居候を2年ほどしている間、父は戦前住んでいた家があった場所の地主さんの許に何度か通い詰めて、最初のうちは難色を示していた地主さんから、その土地を賃して貰えることになりました。

そこで、母は実家の兄に頼み込んで、実家の脇に建てていた一部が廃だった長屋（と呼んでいましたが大きな物置）を貰い受け、バラして馬車屋に依頼し東京へと運びました。母の兄の長男（私からすれば従兄、私よりは二十歳近く年上）、彼の親友である桶屋、そして私の父の3人で、何とか人が住める家を作り上げたのです。

当時は未だすべての物が不足していましたが、畳でなくてゴザ、窓にしても紙障子でしたから雨が降ってくれば急いで雨戸を外側に嵌め込む。屋根は瓦とかトタン板などは入手できないので、コルタールを沁み込ませて防水効果を図った厚手の紙。壁はあちこちに小穴のある羽目板一枚で内壁無し。

でも、そんな家であっても、一つ屋根の下で4年振りに家族全員揃って暮らせることになったのですから、最高に嬉しいことでした。

『昭和二十三年頃の麻布永坂町の思い出』

佐藤すみ江

戦後の一番食糧難の時期母の弟たちは大学生。「子供を飢えさせるな」と畑を作った。三井邸は山の



手空襲で蔵がいくつも焼けた母の弟叔父達は少しでも焼けない様にと、外へ放り出して助けた。その頃の貴重な品々のうち大阪ガスの社長さんがドイツかアメリカのアンティックのぬいぐるみの犬の人形を下さった。私と妹はちい子と名付けていつも一緒に遊んでいた。鳥居坂警察署

のおまわりさんが「びっくりした。本物の犬かと思った。」と言う程かわいかった。今、孫正義氏の屋敷になっている一千坪の土地を私と妹は三輪車でころげ廻って遊んだ。犬のぬいぐるみのちい子も一緒に。ある日、バチバチと火が出ていて焼けている。私はとっさに火事だと妹と母に知らせた。しかし、母は野焼きをしているのだからと言う。でも、誰も居ない。私は妹に、「坂下の祖母の家の母の一番下の弟に伝えて」と言ったら母の洗面器に水を入れてたいた。そしたら火が消えた。あちこち火が出ている所をそのアルミの洗面器でたいた。火が消えるではないか。千坪の真中だけ焼けているのでなんとか消し止めた。私は、四月十八日生れ発明・発見の日の生れだ。うれしくなった。アルミの洗面器でバタバタたたくと火が消える。その後、自分でアイデアを出して難を乗り越える喜びを感じるはじめての体験。今に至るまでそれは続く。今、私は七十五歳。昨年2023年介護の資格を取得。今年、つくろい物の終了証をもらう。年配の方は気に入った服とか破れたらもう手に入らない。ちよこつと修理して直せたらうれしいと思うだろうな。又母や祖母によくやったマッサージのツボの勉強もう一つ絵本で英語の勉強申し込んだ。辞書も使わず解らなければ飛ばす。なぜって？年配の人はいく度も苦難を乗り越えて人生生きてきた。彼等が元氣だと日本は安泰だと思っからです。ありがと。

『戦後の港区』

泉宏

我家は慶応年間の明治維新の頃、祖父が江戸出仕となり佐賀より青山に居を移し明治時期に父達が育てられ、その父により私達兄弟も大正昭和初期に生れ育てられた、皆五人共青南小学校に学んだ。青山で凡そ百二十年以上住んでいたのが原住民と呼ばれています。

私は昭和五年生まれで昭和二十年五月の東京山の手空襲で父と家を失い埼玉の熊谷中学に転校の為疎開した、その間の二年半青山を離れたのみて昭和六十四年まで六十年間暮らしています。現在は世田谷区に転居したが、青南時代の級友達が子供の頃住宅地であった青山から商業地域に代わったのに嫌気がさして移り住んだとかで私と同じ気持ちで近所に集まっています。

昭和三十九年に東京オリンピックが行われ、そのため青山通りの拡幅により都電の廃止、道路沿いの建物の建替えがなされ、街並みに変化が起きました。その後、バブル経済が起り地上げ屋の横行で、落ち着いたこの閑静な住宅街が騒々しい商業地と化してしまいました。この青山をはじめ港区の変化は激しく、港区全体の建物も異常とも言える高層化が進み、高層マンションに住むのがステータスの様になりました。戦後の都市計画で赤坂区麻布区芝区が合併し、港区となり、同時にアメリカの区画を真似て区割りの呼称が変わって、思いついただけでも高樹町、霞町、筈町、材木町、福吉町、筆筒町、佐久間町、葺手町、桜田町など旧地名が失われ、町の雰囲気と共に特徴も無くなり、東新橋西麻布等と味気ない呼称となりました。今の若い人達には判り良いのか知れないが、私達の年代では土地勘も狂い見当も付かない。



私は長い事建築に携わり又欧州等の歴史ある国の街並みを見るのが好きで、度々訪れていますが、彼等が新しい建物は、新市街に造り旧市街と分けて街並みを守っているのが羨ましいと思えました。それに比べ我が国は地域経済発展を優先して地方を置き去りにし、人の流れも地方から東京に移動させ、矢鱈と超高層建物を造り優れた街並みも壊して居ます。個々の優れた建物を残す事は出来ても街並みを保存するのが出来ない国民性の様である。

令和六年一月 記九十三歳
本拠地

東京都赤坂区青山北町〇丁目〇〇番地
今は 東京都港区北青山〇丁目〇〇番〇号

『変わりゆく新橋』

池田 林太郎

終戦後、新橋駅周辺は空襲による
焼野原と強制疎開により空地となっ
た跡に、闇市が乱立しました。

闇市はヤクザが支配して、金さえ出
せば何でも手に入る場所として、人々
が群がっていました。そして、米進駐軍
、旧日本軍の横流し物資や食品等



バラック小屋やベニア板の上で販売した成金が出現す
る一方で、竹の子生活で苦しんでいる一般の人々の中
には、ひと時の楽しみのため密造酒のメチルアルコール
を飲み失明したり、ヒロポンを打って廃人になる者が
いました。

また、空腹を満たすためアメリカ軍の食堂から出た
残飯を集めたシチューを一杯十円で求めて食べる者、
そして甘味を望む人々は砂糖の代用としてサッカルン
、ズルチンを使用したお汁粉を買求めました。

しかし、世の中が落着くにつれ、戦火から逃れた佃
煮の(玉木屋)、海苔茶の(丸忠)、和菓子の (胡荻
堂)、天井の(橋善)等の老舗が先行し開店しました。

そして、地方に疎開していた住人、商店、飲食店、す
き焼きの(今朝)パンの(オリエント)等々が帰り、本来
の下町らしい活気が生れ始めました。

桜田小学校は元気な児童に満ち、烏森神社の祭り
や夜店には多勢の人出で賑わいました。

でも、まだ駅のガード下には戦災孤児達が靴磨きを
してお金を得ていました。(宮城まり子がその境遇を
歌ってヒットした)

まだタバコは貴重品であり、道端の吸殻を集めて(モク拾い)作られた物が一本一円で売られていました。
その後、東京オリンピックの開催に伴い都市開発が進み、汐留川が埋め立てられ高速道路となり、新橋駅
前の飲食街は新橋ビルの地下に收容されました。(狸
小路の記念として大きな狸像が入口にある)

やがて、汐留貨物駅の跡には高層ビルが建ち並び、

新橋周辺には一般住宅が無くなり、下町の面影は消
失しました。

現在はサラリーマンの憩いの聖地として、夜遅くま
で飲食店が繁盛しています。

尚、懐かしい桜田小学校は港区立生涯学習センター
として替って存続しており、活躍している事を嬉しく
思っています。

『八十八才をむかえて』

中嶋 房子

私は昭和十一年生れの八十八才になります。戦後
の混乱の中、桜田小学校、芝浜中学校で学びました。
当時の学校は、どこでも敗戦による社会の混乱と極度
の物不足で、学校施設、設備は貧弱、自前の校舎もな
く、戦災で焼け残った学校を間借りして授業をしてお
りました。現在の学校を訪問するたびに、戦争の影響
の大きさが忘れられません。

私の歴史的出来事は、昭和二十年八月十五日の昼
です。毎日、ビクビクして暮しておりました。家族は、
バラバラ終戦のラジオ放送は、近所の
人がラジオのある家に集まり聞きま
した。泣いている人、安堵する人、静
かな、無の昼下がりでした。



国民が手を取り合い、前進のみの
時代、控えめで明るい戦争のない日々
に希望を抱いて。

戦時中、有楽町の駅で爆撃にあった夫は、ずっと背
中に焼夷弾の破片を残したまま、生活してきました。
八十才後半で、破片を手術しましたが、体調が悪く、
令和二年に先立ちました。

語り部として、多くの子供達に当時の戦争体験を
伝える事が出来ました。

校舎も校庭もない、新制中学校で、戦後の教育の変
化、道筋を学べたように思えます。

『緑と町』

高橋 雅雄

祖父の名は春吉、父は重造、共に町の植木屋で屋号
は「植春」。その三代目として昭和五年に生れたのが筆
者「雅雄」。幼い頃から仕事に出かける朝のひととき、
地下足袋の植木職人たちに混じってたき火で暖をとっ

たり、打ち水したりした。時の経つのは早いもので、今
年で九十三才。千葉大学園芸学部造園学科を卒業し
て神奈川県庁土木部計画課へ入庁。景勝地の多い神奈
川県で大規模都市公園や新旧の景勝地の整備や管理
など、所謂街の植木屋とは一味も二味も違った仕事に
取り組んだ。

神奈川県には景勝地として人気のある箱根を始め
として、丹沢、真鶴半島、湘南海岸、三浦半島、鎌倉な
ど造園人の仕事場は多種多様、幅広い分野で常に新し
い視点で仕事に取り組んだ。一方、経済発展の勢いも
激しくなり、人口増加、交通機関の発達につれて、「都
市に緑を」とって変って各所にビルの高層化計画が起
り、ひと頃より、緑への執着の度合が薄くなってしまっ
た思いがする。少し気にかかること
だ。

以前にも中国の諺である「前人栽
樹後人涼」という諺を紹介したこと
がある。先輩が樹木を植えつけられ
ば後輩達がその木のお陰で涼をとる
ことができる恩恵を受けることを言っている。古い話
になるが、父の得意先の元国立西洋美術館館長富永
惣一氏宅の庭を新設する際、どのような感じの庭に
仕上げたらよいかご意向を伺った際、即座に返ってき
た言葉が「私は金(かね)の匂いのする庭は好きでない」
とのことだった。今もって興味深い話として記憶に残っ
ている。



『語り部座談会』

2023年の語り部の会(第2・第4水曜日)で、語
り合われた当時の思い出を抜粋してお伝えします。

『ドラマ「君の名は」の思ひ出』

戦後に流行ったドラマ「君の名は」。当時、8時頃か
ら放映が始まるため、お風呂屋さんでガラガラになる
ほどみんなで熱中していた。物語は、戦争によって別々
になってしまった男女が、たくさんのすれ違いを経て
再会が叶う恋愛ドラマだ。現代のアニメ「君の名は」と
は物語が異なる。

戦時中は、「兵隊さんが戦っている時に、恋愛をして
は絶対にいけない。」という風習があり、青春が消えて
しまった年頃の人や、恋人を残して戦死してしまい、
再び会うことが叶わない戦争犠牲者がざらにいた。そ

の最中、「君の名は」は、恋愛への憧れや自身の経験を
人々に彷彿させ大変な人気となった。戦時中は、恋愛
さえも自由が奪われてしまったのである。

『戦時中の代用品』

戦時中は、色々なものを代用品
で使用するようになった。それは
貨幣も同じ。金属がなくなってい
く日本は、陶器でお金を作られた
こともあった。紙がなくなれば、ハ
ガキが小さくなってしまい、配給
制になってしまった。軍人以外の銅
像、ハチ公も一度供出されてしま
ったくらい。お鍋も土鍋でやって、
私たちの指輪やネックレスも出す
ことになった。これに協力しなけれ
ば非国民になってしまう。でも本当に弾になったのか、
はたまた、闇市で流れてしまったのかはわからない…。



『ばるーんの『語り部』ってなあに？』

平成十三年「生涯学習ボランティア講座」事業とし
て、生涯学習センター内桜田小学校記念室に、新橋界
隈を中心とした区民の方々が集まり、「昔の港区」の
学習会を行っています。平成十五年度からは、小学校の
学習支援活動として、語り部のメンバーが区内小学校
に出向き、子どもたちにいろいろな昔話をしています。
そして、平成二十八年からは、港区平和青年団の事
前研修の一環として、高校生の皆さんと交流会を行っ
ています。戦争の悲惨さや平和の大切さを経験者の言
葉として伝えるために活動をしています。

地域の歴史や暮らし、戦争の貴重な体験など、過去
を風化させずに未来へ語り継ぐために現在もメンバ
ーを募集中です。ぜひ、興味のある方は、ばるーん「語り
部」担当までご連絡ください。

発行・問合せ 港区立生涯学習センター(ばるーん)

住所 〒一〇五〇〇〇四 東京都港区新橋三十一番一三
電話 〇三(三四三二)一六〇六 FAX 〇三(三四三二)一六一九



↑ホームページから過去の新聞を
ご覧いただけます。
ぜひ一度ご覧ください。